
何があっても君が好き

usa

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

何があっても君が好き

【Nコード】

N0473S

【作者名】

Usa

【あらすじ】

新婚の工藤夫婦の元に謎の封筒が送られてくるようになった。

そして『妹を探してほしい』という謎に包まれた依頼人。

更に新一にいいよる謎の少女まで現れる。

新一は依頼人の妹を探し出し、封筒の謎を解くことが出来るのか・・・！？

謎の封筒

「新一。また来てる・・・」

ある日の朝、蘭が言った。

手には少し大きめの封筒がある。

「またか？わりいけど捨てといてくれよ」

新一がうんざりしたように言った。

二人はつい一カ月ほど前に結婚したばかり。

つまり、まだ新婚なのである。

「何コレ・・・一体どこで・・・」

蘭は封筒を開き、中のものを取り出す。

中身は新一の写真だった。

事件現場・大学への通学途中・講義中の居眠り写真などなど。

更には蘭と一緒に歩いているものまであった。

新一は一回舌打ちすると、蘭からそれらを取り上げゴミ箱に捨てた。

「気にすることねえよ」

「でもあれじゃストーカーじゃない！」

「大丈夫だって。気にしとくだけ損だ」

そう新一は言ったが、蘭の顔が晴れることはなかった。

一か月前、二人は両親や友人を招き、小さな結婚式を挙げた。

その式に出席したもの以外は二人が結婚していることは知らない。

大学生探偵工藤新一が結婚したとなれば、世間が大騒ぎするかもしれないからだ。

蘭も全く無傷ではいられないはず。

それで周囲からの勧めもあり、二人は結婚を内密にしたのだ。

それがつい最近ばれてしまったのだ。

原因は新一である。

蘭が大学で仲良くなった男子と歩いていることに嫉妬して、

うっかり自分達が夫婦であると言ってしまったのだ。

その場にいた生徒から噂が広まり、結局は世間全体に知られてしまったのである。

そして次の週あたりから、毎週封筒が送られてくるようになったのだ。

大方新一のファンからであろう。

しかも毎回蘭宛に来る。

丁寧なことに『毛利蘭様』とかいて。

新一はそれを見ると即破って捨ててしまうのだが、蘭にはできなかつた。

少しショックが大きすぎたのだろう。

新一も少しは反省していた。

もとはといえば彼のせいなのだから、当然といえば当然なのだが……。

「蘭、心配することねえって。オレがついてる。お前には危害がいくことはねえから」

新一が優しく言うと、蘭もようやく笑顔になった。

もちろん普段の明るい笑顔ではなく、無理をしているような笑い方だった。

「そうだね。わかった。さて、私も支度しなくっちゃ！」
と、蘭は無理に明るい声を出した。

謎の封筒（後書き）

どこまで嫉妬深い人なんでしょう、新一君……。

次回には、あのカップルが登場。

注 『まじっく快斗』の原作を読んでいないので、多少キャラが違つ可能性がございますが、予めご了承ください。

謎の少女

二人の大学は帝丹大学だった。

「じゃあ、またあとでね」

すぐに講義のある蘭は新一とカフェテリアのそばで別れる。

「くーどう君」

うしろから突如声をかけられる。

(出た・・・)

新一はわざといやそうな顔をして声の主を見た。

「なあに、その顔は。女の子には優しそーにしなきゃだめだよ」
現れた少女はニコニコとしている。

「工藤君も講義まだなの？メグもなんだ。一緒にお茶してよ」
などと言って少女は新一の腕をつかんだ。

だが新一は少女の腕を即振り払う。

「触るな、つたく」

「えー何で？好きな子の手触っちゃいけないの？」

全く懲りていない様子の少女に新一はイラッとしたようにため息をついた。

「オレ慨婚者だけど」

「知ってるよ」

「じゃー余計に・・・」

「だって奥さんて幼馴染なんでしょ？メグと先に会っていたらもうちょっと別の結果だったかもしれないし」

コエタメグミ
小枝愛美

一カ月ほど前から新一に目をつけこうして追いかけて回している。

少女のような幼い顔立ちをしていて、目立つような顔をしているわけではないが、そのしぐさや表情が好感をもたれているらしい。

「ふざけんな。オレと蘭が幼馴染じゃなくなったらオレは蘭に惚れるよ」

そう言うと新一は一人でその場を離れた。

「全く新一ってば」

大学のカフェテリアにて。

一時限目の講義が終わり、蘭は紅茶を飲みながら愚痴を言っていた。

「どしたの。ケンカ？」

話し相手は・・・蘭！？ではない。もちろん。

蘭にそっくりな、しかし少し子供っぽい少女だった。

「別に喧嘩じゃないけど・・・さっきあの小枝さんと人と一緒にいて・・・」

何デレデレしちゃってんだか」

蘭はイライラしながら紅茶に砂糖を入れた。

「青子ちゃんは何？快斗君とどうなの？」

すると、青子と呼ばれた少女は顔をしかめた。

二人して同じような表情をしているとまるで双子だ。

「別に・・・快斗、最近マジックの練習ばかりだし」
「新一もよ。いっつも事件事件って・・・」

二人はそろってため息をついた。

「で、小枝さんとなに話してたの、工藤君」

「さあ。知らないけど・・・」

中森青子は蘭と同じ授業をとっていた少女だった。

左手の薬指には指輪がある。

来月には幼馴染・黒羽快斗と結婚する予定だ。

「青子も心配になってきたなあ。快斗大丈夫かな」

「黒羽くんは平気なんじゃない。新一は付きまとわれていることに
気付いてないから心配なの」

自分もそうなのだが、気付いてないらしい。

「あっ、そろそろ次の講義始まっちゃう。行こ蘭ちゃん」
二人は講義に向かう。

新一はそのころ、夢を見ていた。

自分は今、蘭とキスしている。

だが・・・

『ねえ新一。おい、新一ってば!』

(え・・・っ? 蘭の声・・・)

その声で新一はハッとして起きた。

『あっ、起きた?』

そう言っつて新一に笑いかけるのは蘭・・・ではない。

女ですらない。

「てめ黒羽! いいところだったのによお・・・」

「ま、落ち着けて」

と言って新一の隣に座り込む青年は・・・新一！？ではない、これまた。

「随分気持ちよさそうに寝てたな。何の夢見てたんだよ」

「な、なんだっていいーだろ／＼」

「寝言言ってたぜ。『蘭、蘭』って」

「マ、マジかよ・・・」

「大マジ」

黒羽快斗は真剣な表情でうなづく。

新一そっくりな快斗は赤面している新一を見てけらけらと笑っている。

講義中にも関わらずこんな騒いでいる二人を誰も注意しない。

「工藤君、また寝てたの？」

愛美が来た。ちゃっかりと新一の隣に座っている。

「しょうがないなあ。次寝ちゃったらメグの美声で起こしたげるね」

「ムリムリメグちゃん。コイツ蘭ちゃんの声じゃねえと起きねえんだから。『ね、新一』」

「それ以上蘭の声使ったらぶっ飛ばすぞ・・・」
と、新一が不機嫌な声を出す。

「えー？大丈夫だよ。メグの声でも起きれるもん」

「耳元で叫ぶならな」

と、新一が皮肉った。

「さ、工藤君、寝ていーよ。メグがちゃーんと起こすからね」
「起きてる」

新一は欠伸をしながら言う。

結局新一は眠気と戦い抜き、愛美はつまらなそうな顔をして出て行った。

謎の少女（後書き）

快斗君と青子ちゃんのキャラあってるかな・・・。

まじっく快斗の原作読んでないんで、間違ってたら教えてください！

次回はついに謎の依頼人登場です！

不思議な依頼人

その日の夜のことだった。

ピンポー・・・ン

工藤邸にある人が来た。

「？お客さん？」

「みたいだな。わりいけど出てくれよ」

新一は推理小説に夢中。

「もう。また本ばっかり！」

しかし、もう一度インターホンが鳴ったため、蘭は玄関へ向かった。

しばらくして戻って来ると、蘭はいやにニコニコしている。

「新一、お客さんよ」

「あ？誰だよ？」

「誰やと思う？」

「さあな・・・は!？」

新一が慌てて小説から顔を上げると、見知った顔が一つ二つ三つ四つ。

「ゲッ、お前ら・・・」

「どや、驚いたか？」

服部平次がニヤニヤとして新一を見ている。

「オレもいるぜ」

「あたしもや」

「青子も」

新一は頭が痛くなってきた。

「なんでいつぺんにくんだよ、お前らは・・・」

「冷たいことは言うなや。会いたかったでえ、工藤」

平次は相変わらず白い歯を見せて笑っている。

「ふざけんな」

「まあまあ工藤君。急におしかけてしても悪いとは思ってるんよ、あたしらも」

服部和葉（旧姓：遠山）がなだめに入る。

「ぐーぜんだよなあ。オレらが新一んとご遊びに行こうとしたらや、たまたま道で平次と和葉ちゃんにあっただよ。な？」
と、快斗が言った。

「ま、せっかくだからゆっくりしてっつてね」

蘭はやはり、ニコニコして言った。

「んで、結局何の用で来たんだよ」

「オレらは別にあらへんで。大阪は事件がなくなってヒマやから、たまには工藤からかいにでも行こかなーと思っつてな」

新一は少しイラツとしたようだったが、そこを抑え、快斗と青子を

見た。

「そうそう。聞けよ、このアホ子が・・・」

「バカイトは黙ってて。あのね、蘭ちゃん。ストーカーの件のこと聞いてね、

青子にも何かできないかなーって思ってたの。工藤君一人じゃ大変だろうし。

それでね、青子と快斗で、蘭ちゃんのボディガードをしようと思っ
て！」

と、青子は瞳をキラキラさせて言った。

「あ、ありがとう。でも大丈夫よ。新一がついてるし」

「えっ？蘭ちゃんにストーカーがいるん？」

蘭を遮り、和葉が大声を出す。

「え、えっと、そんな大したことじゃ・・・」

「つけられてんのは俺だし」

と、新一も言う。

「ほーお、そりやおもろそうやんけ。話聞かせてえな」

平次までが興味心身にたずねてくる。

だが、新一がその話をする、憤慨しはじめた。

「なんやのそれ！蘭ちゃん、気にすることないで。どうせ工藤君の
気を

引きたいだけの女やろうし。なあ平次！」

「あ、ああ。せやな」

「和葉ちゃん。落ち着いて。私もそこまで気にしてないし。

相手にしなかつたらこんなのすぐにおさまるよ」

蘭が慌てて言ったが、和葉の怒りはおさまりそうにない。

「蘭ちゃんは優しくすぎるわ。あたしやったら犯人捕まえて投げ飛ばしたるわ」

と、本気の瞳をして言った。

「でもそんなことしようとしたら、その人きつとまた送って来るもん。」

とりあえず、今は何もしないでおくのが一番いいよ」

と、その時、二度目のインターホン。

「今日は客が多いなあ」

と、平次が呑気な声を出す。

「誰だろ、今度は……」

蘭が出て行くのを見ながら、新一は園子と志保でないことを祈った。

だが、蘭が戻って来た時一緒にいたのは、園子でも志保でもなかった。

「えっと、新一……」

蘭が何かを言う前に、その人物が前に出てきた。

「あなたがあの工藤新一さんですね。わたくし、ミズモトユリカと申します」

「は、はあ……」

新一は彼女が差し出した名刺を受取った。

『水本百合香』と書かれている。

「実は、わたくしの妹と先日から連絡が取れないので……。あなたに探してほしいと思い、ここに来ました」

「妹さんの写真とかはお持ちですか？」

「はい。これです」

そう言っつて百合香という女性がとりだした写真を新一はじっと見つめた。

目の前にいる百合香はおそらく二十代後半だが、ビシツとしたスーツに

綺麗にまとめた髪。銀縁の眼鏡が有能な秘書を思わせるような姿をしている。

だが、写真に写っている少女は制服を着ているが、スカートはこれでもか

というほどに短く、パーマをかけた髪は金髪。

不良には見えないが、姉に似ているようにも見えない。

「あれ、この制服、帝丹高校のじゃない？」

蘭が横から写真を覗いて言った。

「そっぴやそっぴやだな」

新一も頷く。

「妹はんと連絡が出来ひんようになつたんはいつ辺りや？」
平次が同じく写真を覗き込みながら言った。

「あの・・・どなたでしょうか？」

百合香が警戒したように言った。

「オレか？西の名探偵、服部平次や。ほな話聞かせてえな」

百合香はまだ平次をじろじろと見ていたが、ゆっくりと話し出した。

「私のいえは両親が小さい頃になくなって、姉妹二人ですずっと暮らしてました。

ですが、最近妹もやはり高校生ですから、お友達と遊んで帰ることが多くなって、

家に帰るのが遅くなることもよくあったんです。でも、おとこの夜は

帰って来なくなって・・・連絡も途絶えてしまったんです・・・」

「学校では何と書いていますか？」

「わからない、と・・・。見た目はこんなですが、根は優しく、学校が好きな子なんです」

「妹はん、名前はなんて言うんや？」

「レンカ、といいます。蓮に香る、で蓮香です」

ちよつどその時、蘭が紅茶を持ってきてくれた。

「どうぞ」

「いえ、お構いなく」

百合香は硬い表情で言った。

「じゃあここに置いておきますね」

と、蘭がとりあえずテーブルに置こうとしたが・・・。

「結構です！わたくしはいりません！！」
と、百合香は大声で言った。

「あ・・・っ、す、すみません」

「いえ、私も取り乱してすみません」

「し、失礼しました・・・」

蘭が急ぎ足で出て行くのを見てから、新一はもう一度百合香に向き直った。

「急に大声なんか出してしまって・・・すみません」

「いいえ。でも、妻を怖がらせるのはやめていただけですか？」

その言葉に、百合香の表情が少しだけこわばった。

「今日はもう遅いですから、あす、改めてお話をさせていただきますか？」

「わかりました。では、わたくしが2時にこちらへ参りますので」

「はい。では、お待ちしてます」

百合香はすつと立ち上がると、てきぱきと身支度を整える。

「失礼いたします」

そう一言だけ言うと、去って行った。

「きびきびした姉ちゃんやなあ。オレはあーいつかたっ苦しいもんは苦手や」

と、平次が顔をしかめていた。

「でも怖かった……。いきなり怒鳴るから
蘭はまだ青い顔をしている。」

「極度の心配と焦りでイラついてたんだろ」

「だとしても、あの態度はないんとちゃう？」

「しょうがないよ。妹さんが心配だったんだろうから」

蘭は無理に笑顔を作った。

「とりあえず、なんか騒ぐ気分じゃねえし、オレらは帰るか」

「うん……。何か青子も怖くなってきた」

「じゃあないな。今日の所は解散にしようか」

平次の言葉に一同無言でうなずいた。

そして、快斗と青子はそれぞれの家に帰り、新一と蘭、平次と和葉も早々と寝入ってしまった。

不思議な依頼人（後書き）

ついに登場、謎の依頼人！

次からは例の封筒そっちのけでこっちの捜査に入ることでしょう）
いいのか！？）

そして次回は、写真の少女、蓮香ちゃんの謎にすこーーーーーし
だけ、
迫ります。

写真の少女

翌日の午前中。

新一と平次、そしてなぜか快斗も帝丹高校へ来ていた。

「おつ、工藤じゃないか」

「富山先生。お久しぶりっす」

職員室。

新一はたまたまいた元担任と挨拶していた。

「いや、しかしだな・・・工藤は一人っ子だと思っていたが・・・
双子とは思わなかったな・・・」

と、富山は新一と快斗を見比べる。

「あつ、ち、違いますよ。コイツとは赤の他人で・・・」

「へえ。ここまで似ているとは思議なもんだ」

「工藤。そろそろ本題に入ってもええか？」

平次がしびれを切らして言った。

「あ、ああ、わりい」

「何か用でもあるのか？」

「そうそう。富山先生。この写真の子、知りませんか？」

新一がポケットから写真を取り出す。

「ん？・・・いやあ、知らないな・・・」

富山は写真を見つめて首をひねる。

「こ、ここの生徒って聞いたんすけど」

「さあなあ・・・名前は？」

「水本蓮香」

すると、富山の眉がピクリと動いた。

「これが水本？まさか。全くの別人だ」

「えっ？で、でもオレら、その生徒のお姉さんからこの写真を受け取ったんです」

「せや。妹はん探してほしい言われてな」

だが、富山は首を横に振る。

「確かに水本は今行方不明だ。でもこの写真の子は違う。水本はおとなしくて、

顔立ちもお姉さんと似ていたぞ」

その後、何にも教員に話を聞いてみたが、皆同じような答えだった。

違う。彼女はおとなしく真面目で、こんなカッコは絶対にしないし、顔も全く違う。

「この写真の姉ちゃんが別人やしたら、ここで本物の姉ちゃんの写真、

もろたほつがええんとちゃうか？」

「その方が良いだろ。このままじゃ、探す手掛かり何もなくなっちゃうだろっし」

平次と快斗に言われ、三人は再び職員室に行った。

だが、結局写真は手に入れることはできなかった。

いや。彼女の写真は一枚もないと言われたのだ。

教員の話によれば、行方不明になる少し前、彼女自身が自分が写っている写真、すべてを処分してほしいといい、仕方なく捨ててしまったというのだ。

「変な事件やな・・・」
平次がポツつと言った。

「にしても・・・この写真の・・・どこかで見たことあんだよなあ
新一が写真を見つめ、首をひねる。

「なんや、浮気か？」

「バツ、ちげーよ！」

「どこで見たんだよ？」

快斗も同じく写真を見ている。

「でもこれ、化粧もしてるみたいだし・・・よくわかんねえな」

「平次は見たことあるか？」

「オレにはようわからへん」

平次と快斗は見覚えがなさそうだ。

「でも誰かに似ているような気はすんだよなあ」

「せやなあ・・・言われてみると・・・」

「とりあえず、いったん帰るぞ。蘭にも聞いてみる」

と、いうわけで、三人は工藤邸に戻ろうとした。

途中で青子から怒りのメールが来たため、快斗はそっちへ向かう。

「お帰り、二人とも」

「お疲れさん」

工藤邸に帰ると、蘭と和葉がお出迎え。

「なあ蘭。これ、どこかで見たことねえか？」

新一が早速写真を取り出す。

「え？」

蘭は一瞬驚いたようだったが、じっくりを写真を見た。

「う・・・うん、そういえば・・・でも誰だっけ？」
「オレ達が見たことあるヤツってことは、園子と宮野も知ってっか
もしんねえな」

新一と平次は顔を見合わせると、そろって再び飛び出す。

阿笠邸。

慌ててインターホンを押すと、まず阿笠博士が出てくる。

「新一。それに服部君も。どうしたんじゃ」

「ちよつと宮野に聞きたいことがあってさ・・・いるか？」

「志保君ならいるが・・・今は呼び出しても来ないと思うが」

「何の用？」

そこへ、当の宮野志保が登場。

「宮野！わりいんだけどさ」

「事件なら手伝わないって言ったでしょ」

志保がバツサリと言い放つ。

「ち、ちげえって！この写真の子、見覚えねえか？」

志保は面倒臭そうにその写真を見た。

そして、少しだけ驚いたような表情をした。ほんの一瞬だったが。

「・・・」

「誰だか知んねえか？」

「ええ、知ってるわよ」

志保の言葉に、平次はよっしゃあ、と言った。

「で、これは誰なんや?」

「自分で考えたら、探偵さん」

志保はそう言って意味ありげに笑うと、中にはいってしまった。

「一体誰じゃ?」

博士も目を皿のようにして写真を見ている。

「今引き受けている事件で、この子を探してほしいって依頼されたんだけど・・・」

どうも本人じゃないらしくってさ。オレも蘭もこの子を見たことあるし・・・」

「じいさんは見たことないんか?」

「どうかのお・・・似た人をもう何年も前に見たような・・・」

「じいさんの何年も前っていつやねん。もうええわ。戻るで工藤」

そついうと、平次はスタスタと先に行く。

「博士。思いだしたら言ってくれよ。じゃあな」

「わ、わかった」

「志保、なんて言ってた？」

「ああ、やっぱり見たことあるって」

「あの姉ちゃん、あれは完べきにコイツがどこの誰だか知っとる顔
やったで！」

平次が少しイラつき気味に言った。

「まあな。オレ達をからかっているとは思っただけどよ」

「園子にも聞いてみる？」

蘭がケータイを取り出すが、新一は時計を見てそれを制した。

「いや。もうすぐあの水本百合香って人がくる。その時じっくり話を聞くさ」

新一はにやりと笑った。

写真の少女（後書き）

突然ですが、お知らせです。

明日から新学期に入るので、更新が遅れる可能性があります。

いつになるかわかりませんが、それまでに写真の少女の謎、皆さんも解いてみてくださいね。

再びの封筒

その日の夜、新一と平次はぐったりとソファに座っていた。

「なんなんや、あの姉ちゃんは。あれは妹はんちゃうって言われた
つちゆうんに、

『化粧すれば女は変わるから気のせい』やと。腹立つわ〜」
「でも実の姉が言ってるんじゃない、どうしようもねえしなあ……」

二人は同時にため息をつく。

「で、肝心のこの写真の姉ちゃんは誰なんや？」
平次が写真をひらひらとさせる。

「オレだって考えてんだよ」
新一もイライラと答える。

「まだ思い出せへんの？」
そこへ、コーヒを持って和葉と蘭が現れる。

「おかしいなあ。絶対にどっかで会ったことある人はずなんだけ
ど……」

「そついや、あたしも見覚えあるわ、この子」

「全員が見覚えがあって、何でこんなわかんねえんだよ」
と、新一が軽く舌打ちする。

すると、蘭が思いついたように言った。

「まだ全員じゃないよ、新一！」

「んあ？」

「園子と青子ちゃん！あの二人にも聞いてみようよ！」

「そりゃええわ。ついでにもう一度志保さんにも聞いていた方がええんとちゃう？」

「園子と宮野はともかく、青子ちゃん呼んだら黒羽だつてくんだろ」

新一は面倒臭そうに言った。

「いいじゃない、別に。呼ぶからね！」

蘭はそういうと、ケータイを取り出す。

「そんじゃあたしは志保さん呼んでくるわ」

と、和葉は外に行く。

「これでわからんかったら、オレらただのあほやんけ」

「今日についてねえ・・・」

そして、一時間後、工藤邸にすべてのメンバーが集まった。

「新一君。あたし達に見てほしいもあって?」
園子が興味心身にたずねる。

「これだけどさ、見覚えねえかなって思ってたさ」

新一が例の写真を取り出す。

それを、全員に見えるように掲げる。

「またこれかよ」

と、快斗は顔をしかめる。

「これ、だあれ？」

青子が第一声にそれを言う。

「わからねえ」

「もうこの写真なら見たわよ。まさかまだこの人の正体がわからな
いって言うの、探偵さん」

志保が言うと、新一と平次が一瞬悔しそうな顔をした。

「どう、園子。見たことないかな」

蘭が園子に向かって尋ねるが、園子は聞いていないようだった。

写真を食い入るように見つめている。

「こ、この写真、どこから手に入れたの!？」

「!？み、見たことあんのかよ!」

「だ、誰や、コイツは!」

新一と平次がものすごい剣幕で園子に詰め寄る。

「誰も何も、コレあたしよ!」

しばしの沈黙が訪れる。

その間、志保が一人にやりと笑った。

「はあ!!?」

「その話、ホンマか!」

「え、ええ。高三の時、ちょっとふざけてやっただけなんだけど・・・」

と、園子は写真を取り上げ、早口に言った。

「あゝもうっ。この写真捨てたはずなんだけどなあ
「捨てた?」

蘭が聞き返すと、園子はこっくりとうなずいた。

「うん。最初はプロフにはっておいたんだけど、真さんに見つかり
そうになっちゃって、
こんなカツコ見せらんないし・・・」

言っていくうちに、園子の声が小さくなっていく。

「お願い!真さんには黙っててね!」

「そりゃかまわへんけど・・・」

「じゃあ水本蓮香さんて・・・」

蘭と和葉が顔を見合わせる。

「これ、この間の方が置いていった妹さんの写真なんですよ?
じゃ、あの人の妹さんって、園子ちゃんだったの?」

一人無邪気に青子が言った。

「えっ？し、知らないわよ。姉貴が、来たわけじゃない・・・よね？」

「全然違う人」

「そんじや、あの水本百合香っちゅう姉ちゃんが嘘ついとるんは確
実になったわけやな」

平次が面白そうにニヤツと笑う。

「ああ。次こそは本当の妹さんのこと、話してもらおうぜ」

だが、水本百合香はなかなか現れぬまま、日は過ぎて行った。

「あ……また」

蘭が郵便受けから、大きめの封筒を取り出す。

「蘭ちゃん。それなんなん？」

「この間話した毎週来る封筒」

そう言って、蘭はまた開けようとした。

「す、捨てた方がええよ、蘭ちゃん」

「え？大丈夫だよ。どうせ新一のストーカー……」

そこまで言って、蘭の言葉が途切れた。

「？どうしたん、蘭ちゃん？」

「……」

「蘭ちゃん！」

和葉が少し強めに蘭の方を揺さぶると、蘭の手から封筒が落ちた。

そして、和葉も見ってしまった。

恐ろしい封筒の中を……。

再びの封筒（後書き）

こんにちわです。久しぶりの投稿となりました。

今度はいつできっかなあ・・・。

皆さま、見捨てないくださいね！

謎の封筒の中身、一体何なんでしょうか・・・？

お楽しみに

恐ろしき写真

その日、蘭は大学に来なかった。

あのあと、気分が悪いと言って、倒れてしまったのだ。

今は和葉がつきつきりで見病してくれているはずだった。

「で、その写真には何が写ってたんだよ？」

講義中、一番後ろに座っていた新一と快斗。

眠そうに欠伸を繰り返す新一の横で、快斗はマジックの練習中。

「オレんちの写真」

「？それがシヨックだったのか？」

「家を撮ってたんじゃないやねえよ。家の中を撮ってたんだ」

なるほど、と言うように快斗は指を鳴らした。

鳩が一匹パタパタと飛んで行った。

「つまり、お前のストーカーは、すでに工藤邸の中にまで入ってきてるって警告してきたってわけだな」

「まあそんなところだろ。でも問題は・・・」

「どうやってお前んちに侵入したか、だろ。オレなら簡単だけど」

快斗は最後にポソつとつぶやいたが、新一は聞いていないようだった。

た。

「一番怪しいのは、水本百合香って人だ。あの人ならオレの家に入
って来てたし、

妹が行方不明つても口実かもしれないねえしな」

「でも行方不明はホントのことだったじゃねえか」

その言葉に新一は目を開けて真剣に考え出す。

「だとしたら・・・」

「ねえねえ何の話？メグにも聞かせてえ」

最悪のタイミングで愛美の登場。

新一は舌打ちしたそうな顔をした。

「あつ、そーいえばさ、今日もーりさんみないんだけどお、どーか
したのお？」

「蘭は毛利じゃねえっつもの！」

イライラしながら新一が訂正する。

「そそ。蘭ちゃんはれっきとしたコイツの奥さん、工藤蘭ちゃんな
んだからさ」

快斗にまで言われ、愛美は面白くなさそうに頬をふくらました。

「なんか用でもあんのか？」

ないのならさっさと消えろという言葉で新一は呑み込んだ。

「べっつにい。好きな子のお話を聞きたいなあって思ったただかもん」

そう言うとき愛美は、本当に何をしに来たのやら、さっさとどこかへ行ってしまった。

「オレ的にはあのメグちゃんも十分に怪しいけど？」

「十二分の間違いだろ。でもアイツはオレの家を知らねえし、ましてや勝手に入って来るなんてこたあ・・・」

そこまで言って、新一はもう一回欠伸をした。

「じゃ、オレもう帰っから」

「は？もうかよ」

突然立ち上がった新一を快斗が驚いたように見た。

「蘭の様子も気になるし、調べたいこともあっからよ」
そう言って新一は軽く手を振って帰った。

「あ・・・お帰り、新一」
「早かったやん」

工藤邸に戻ると、和葉と、少し顔色の悪い蘭がいた。

「大丈夫か、蘭」
「うん。平気」

蘭は弱々しく微笑む。

「念のため、明日病院行ってこよかと思ってんねん」
「あ、ああ。わかった」

新一はせわしなく時計を見た。

「服部は？」
「書斎の方に行ったよ」
「そっか。サンキュ」

そう言うが早いか、新一は書斎の方へ駆けだす。

バンとドアを開けると、平次が驚いた表情で新一を見た。

「な、なんや工藤かいな。ビックリさせんなや」
「おい、今から帝丹高校に行くぞ！」

平次の言葉なんか聞いていない様子で新一が言った。

「き、急に何言うてんのや。何かあったんか？」
「さっき帰って来る途中、富山先生から連絡あってさ」

新一は平次がたった今読んでた小説を取り上げた。

「んで、なんて言っただんや？」

「搜したらあつたつうんだよ！水本蓮香の写真！」

これには平次もあわて始めた。

「なんやてえ！？それをばよ言わんかい！」

「だーっ。今言っただる。さっさと準備しろよ！」

二人して怒鳴りあい、十五分のロス。

「なんなん？でっかい声出して」

「あれ？どこか行くの、二人とも」

新一と平次の怒鳴り声を聞き、蘭と和葉もやってきた。

「あ、ああ。ちよっくら行ってくるわ」

「具合まだわりいんだろ？おとなしくしとけよ」

そう言うと、二人は同時に工藤邸を飛び出して行った。

取り残された蘭と和葉は、互いに顔を見合わせるほかなかった。

恐ろしき写真（後書き）

次から物語もついにクライマックスを迎えて行きます。

『早っ』って思った方、すみません。

次回はついに、謎の少女、蓮香の正体が……!?

本当の少女・・・

「富山先生！」

帝丹高校職員室。

経った今、三つの人影が一斉に乗り込んできたところだった。

「な、なんだ、工藤か・・・。驚かすな」

富山教諭は胸に手をあて呼吸を整えている。

「早かったな、ずいぶん」

「え、ええ。走ってきたものですから・・・。」

新一と平次は膝に手をつけてせえせえと言っている。

「んで、富山先生でしたっけ？その水本蓮香ちゃんの写真は？」

快斗がニコニコと愛想笑いを浮かべている。

だが、新一と平次はぎょつとしたように彼を見た。

「お、お前いつからいた!？」

「は？ずっといたぜ？もう少し上の方の文をしてみるよ。ちゃんと三つの人影って書いてあんだろ」

新一が驚いた様子で言っても快斗は至って涼しい顔。

「ほら。これが水本だ。修学旅行の写真でな。これだけ捨て忘れていて残ってたみたいだ」

そう言つて富山教諭は一枚の写真を三人に差し出した。

その瞬間、新一と快斗の顔色がさつと変わった。

「黒羽……こいつ……」

「あ、ああ。そう……だよな」

一人意味のわからない平次は不満げな顔をしている。

「おい、この姉ちゃん誰かわかったんか？」

「あ、あとで話す。じゃ、ありがとございました、富山先生」

「おう。頑張れよ」

三人は帝丹高校をあとにする。

帝丹高校を出て三人は米花公園へと来た。

夕暮れ時とあって今は誰もいなかった。

「そろそろ話してほしいんやけどなあ」

「オレにもよくわかんねえ。一体何なんだよ」

平次と快斗が一人考えている新一に向かって言った。

「明日、水本百合香と、水本蓮香をオレの家に呼びだす」

突然新一が言った。

「はあ！？何いっとんのやいきなり」

「どういふことか説明しろよ」

新一は一つ息を吐くと、二人に耳を貸せ、と合図をした。

三人は額を寄せあった。

そこで新一は二人に自分の推理を披露した。

そして、自らの計画を。

「な、なんやと？そないなこと、できるんか？」

計画を聞いた平次が驚いてそう言った。

「できるに決まってるんだろ服部。だってコイツは・・・月下の魔術師・怪盗キッドさんなんだからよ」

新一の言葉に、快人は一瞬虚を突かれたように新一をみ、フツと笑

った。

「……いつから気付いていた、名探偵」

懐かしの怪盗の口調で快斗がたずねた。

「うすうす感づいてはいたよ。お前よくオレの前で蘭の声色真似てたし、

ばれてもいいとは思ってたんじゃないのか？」

「それだけか？」

「あとひとつは……」

新一がぬつと快斗の顔に手を伸ばし……思い切り引つ張った。

「いてっ。いてててっっ」

「キッドはオレの顔に似てるらしいしな」

それで平次もなるほどと言った感じに快斗と新一の顔を見比べた。

「だからっていきなり引つ張んなよ。マスクじゃねえんだからよお」

快斗はまだ頬をさすっている。

「で、どうする？やるか、黒羽」

「ああ、いいぜ。怪盗キッド、二年ぶりのショーを見せてやるよ」

快斗はあの不敵な笑みを浮かべた。

本当の少女・・・（後書き）

ええっと、毎度のことながら、急な展開ですみませんでした。

次はついに、すべての謎が明らかに・・・！なんちって

次回もお楽しみに。

真実

次の日の朝早く。

工藤邸に水本百合香が来た。

彼女はきびきびとなかに入ってきて、新一を見ると早口に言った。

「工藤さん。妹が見つかったというのは本当でしょうか!？」

「ええ。そうです」

普通なら言はずだが、百合香はなぜか青ざめている。

「ま・・・あ、そうでしたか。よ、良かったですわ、本当に・・・」
と、ハンカチを取り出し、目元をぬぐっているかに見えた。

だが、すぐ近くにいた平次は、百合香の目には涙などなく、代わりに冷や汗が出ているのが見えた。

そこへ蘭が紅茶とクッキーを持ってきた。

「わたくしはいりませんと申し上げたはずですが」
蘭の姿を見ると、百合香は冷たく言い放った。

「そうでしたね。すみません」
蘭はそう言つと、とりあえずお盆をテーブルに置き、自分も新一の隣に腰かけた。

「この方もいなくてはいけませんか?」

百合香は少し不愉快そうだった。

「ちょっと色々ありました」「
と、新一は意味ありげに笑う。

「それで工藤さん。妹は・・・？」

「どうでしょうか。そろそろ来るはずなんですけどね・・・」

そこへ、インターホンが鳴った。

「蘭。連れてきてくれ」

「はい」

百合香は落ち着かない様子で指を組んだりほどいたりしている。

「連れてきたよ」

「どうぞ、はいつてください、水本蓮香さん」

蘭が横にどくと、後ろにいた少女の姿が見えた。

「いや、こいつらの前じゃ、別の名前なのつとるみたいやけどな」
と、平次が少女を見た。

少女はソファに座っている百合香を見て、驚いたような表情になった。

百合香も少女を見てかたまっている。

「百合香さん。ご依頼通り、妹さんを見つけましたよ」

「コイツが水本蓮香や。工藤達の前じゃ、小枝愛美、と名乗ってた
そうやけどな」

新一と平次は同時に少女に指を向けた。

「や、やったあ、工藤君てば。メグはメグだよ？」

愛美は笑ったが、声が震えている。

「せっかく工藤くんちに呼ばれたと思ったのに」

「工藤さん。この方は違うのでは？わたくしが預けた写真と全く・
」

「ええ。全くの別人です。当たり前でしょう。あの写真の方は僕ら
の友だちだったんですから」

百合香を遮り、新一が言った。

「そ、そんなことは・・・」

「あんたらの計画はこつや」

今度は平次が話し出す。

「まず、妹のあんたが大学生に化ける。化粧をすればわからへんっ
て、

この間姉ちゃん言ってたからな」

「そしてあなたが僕の家にも『妹さんを探してくれ』と依頼しにくる」

「妹はんの顔を知られとるから、本物の写真は使わへんかった。

その代わり、この写真をネットのプロフトか言うやつで見つけたん

やる」

平次は園子の写真を出してきた。

「この人が僕らの友だちでなければ、気付くのに相当な時間がかかったでしょうね。まんまと引っ掛かりました」

「メ、メグは大学生だもん！」

愛美が大声を出した。

「蓮香なんて知らない！違うもん！」

「おっと忘れてた。これ、あなたの学校で拝借してきた、本物のあなたの写真です」

新一はもう一枚写真を取り出した。

「そっくりやな、あんたに」

確かに、メイクを落とせば愛美と蓮香の顔は同じだった。

「た、他人のお空に！」

「空似やるが。それと、オレらは帝丹大学の名簿も調べてみたんやけど・・・」

と、蘭が今度は何かの資料のコピーを持ってきた。

「これを読めばお分かりでしょうが、帝丹大学に、小枝愛美という学生はいないんですよ」

二人の探偵が同時にニヤリとした。

「さてさて、水本百合香さん、蓮香サン。何が目的でしょうか？」

「だ、だからメグは……」

「もういいわ。蓮香」

百合香が静かに言った。

「お、お姉ちゃん……」

愛美、いや蓮香は怯えた声を出す。

「あんたらやる。ここに毎週変な封筒送ってきよったんわ」

平次の問いに百合香が目を伏せた。

「工藤新一さん以外にも、素晴らしい探偵さんがいたようですね……」

その言葉に少々平次は何か言いたげな顔をしたが、新一が止めた。

「なぜあんな写真を？」

「私達は……工藤さん、あなたを崇拜するある組織に入っていました。」

主にあなたが解決してきた事件や、あなたの周りの人物の方々を調べていました」

「やっぱりストーリーカーやないか」

と、平次はボソツと言った。

「あなたがご結婚されているとの噂が流れはじめたころ、組織の中で変化が起きました。」

私達のリーダーの方が、あなたの結婚はいけないことだと言いはじめたのです」

「ほお。それで・・・？」

「あなたの仕事のじゃまだとか、一人占めはいけないと言いだして・・・
今思えば非常におかしいことですが、その時私達は本当にそう思っ
てしまっただんです」

「それでこのようなことを？」

と、新一がたずねると、百合香はこくりと頷き、さらにつづけた。

「組織の中で一番大学生の年齢に近い蓮香があなた方の大学に潜入し、

私は蓮香の行方不明を理由に、この家に潜入したんです」

「そして僕の写真を毎週蘭苑に送ったが、あなた方のリーダーはそれでは満足しなかった」

「はい。私達のリーダーは、あなた方を別れさせようと言いだし、蓮香にあなたを誘惑させようとしたんです」

「残念やったな。見事にそれは失敗や」

平次が言うと、百合香は弱々しく微笑む。

「いえ、これで良かったんです。きっと・・・」
そう言うと、顔をきつと上げ、

「行きましよう、蓮香」
と、蓮香の手を握り、立ち上がる。

「ど、どこに・・・？」

「決まっているでしょう、警察よ」

「や、やだよ！」

蓮香は姉の手を振りほどくと、近くにあったはさみをつかんだ。

「お姉ちゃん、大丈夫だよ、レンがそんなことさせない」

「やめなさい、蓮香！」

百合香ははさみを取り上げようと妹に近付いたが、蓮香はだつと走ると、

ある人物の喉にはさみをあてた。

「無理しないで、お姉ちゃん。工藤君。レンはちゃんと知ってるんだよ。」

あなたがどんだけこの人を大事に思っているか・・・」

そう。蓮かがまっすぐにはさみをあてていたのは、蘭だった。

「動かないで。私、なにをするかわかんないから・・・！」

確かに彼女の眼には狂気が入り混じっていた。

だが、蘭を人質に取られているというのに、新一も平次もいたって平然としている。

当の蘭も大人しくしている。

「そうですか、では・・・」
と、新一はためしに、というように一歩前に出た。

「こっ、来ないでえっ!」

蓮香は叫ぶと、はさみをやみくもに動かした。

「・・・え・・・っ?」

最初に声をあげたのは蓮香だった。

「いけませんよ、お嬢さん。あなたのように可愛らしい方には
そんなものよりも、こちらの方がお似合いですよ」

なんと。

蘭がいた場所には真っ白な衣装を身にまとい、真っ赤なバラを掲げ
ている怪盗キッドがいる。

「か、か、か、かい、とう・・・」

百合香があまりのことに口をパクパクとさせている。

「ああ、美しく知的なお嬢さん。そんな顔をされしないで。笑顔の方
がずっとお美しいですからね」

キッドはそう言うと、ハトを次々に出してくる。

水本姉妹はあっけにとられてキッドのマジックを見ている。

キッドは最後に指を鳴らし、ハトをすべて消し、代わりにバラの花
を降らせた。

「怪盗キッド、二年ぶりのショーをお楽しみいただけましたかな、お嬢さんがた。ではこれにて失礼」

怪盗キッドハポンという音と同時に姿を消した。

「お、お姉ちゃん。い、今の・・・」

「残念ながら蓮香サン。あそこにずっといた蘭は、偽物だったようですねえ」

新一と平次は二人に近付いた。

「あんたら一つ誤解しとるわ」

「「えっ？」」

「僕らはあなた方を警察に突き出そうとはしていません」

新一の言葉に、水本姉妹は啞然としている。

「な、なぜ・・・」

「幸い、蘭もそこまで気にはしていないようですから」

「あなたの年齢詐称やらはあるけど、黙っとけばきづかへんと思うで」

二人の探偵を、百合香と蓮香は交互に見つめた。

「あ、ありがとうございます・・・!!」

百合香が最初に頭を下げ、蓮香も慌てて一緒に頭を下げる。

そこへ（本物の）蘭と和葉が帰ってきた。

「ただいま・・・あれ？」

「なんやのコレ。なんかあったん？」

二人がキョトンとしている。

「あ・・・私達、出てよっか」

「平気。レンたちもう出てくから」

蓮香は涙をぬぐった。

「こ、小枝・・・さん？な、なんで・・・」

蘭は言いかけて新一を睨んだ。

「い、いや、話すと長いんだ。あとで話すからよ」

「工藤さん」

百合香が新一と平次に近付いてきた。

「本当に、ありがとうございます」

「ああ、いえ。オレはなんもしてませんから」

「あなたは私達の恩人です。それに、服部さんも」

百合香は平次を見た。

「そ、そうか？」

と、平次はまんざらでもない表情。

和葉は少し不愉快そうな顔をする。

「レン、服部君のこと狙っちゃおっかな」
蓮香がいたずらっぽく言った。

「コラ蓮香!」

「ええんや別に。どうせ俺には一生傍におると決めた女がおるんやからな」

それを聞き、和葉の顔が赤く染まった。

「では・・・失礼します」

そう言うと、水本百合香、蓮香は去って行った。

真実（後書き）

こんにちわ。

今回もかなりの意味わからん展開、すみません。

次で最終話の予定です、見て下さい

幸せ

「おーい、終わったかあ？」

こっそりと壁に隠れていた快斗が顔を出す。

「ああ。もういいぜ、出ても」

新一が言つと、快斗はホツとしたような表情で壁からは出てきた。

「っあー！ずっと同じかつこだったからなあ。さすがに疲れたぜ・

」

「そりゃお疲れさん」

ぐったりする快斗に平次が言つた。

76

「終わつてよかったな。もう組織がらみの事件はこりこりだぜ」

「でも大成功だったな。新一に蘭ちゃんに化けてくれて言われた時は驚いたけどよ」

と、新一と快斗が言つた。

「ちよつと！どういうこと？」

「さっぱりわからへんわ。何があつたん？」

帰つて来たばかりの蘭と和葉には全く状況が理解できていない。

「ま、それはあとでゆっくり話してやつから」

「そうそう。・・・あ、青子からか」

快斗が鳴り響くケータイを取り出した。

「もしもし?」

『ちよつと快斗お! 今日式の打ち合わせあるからねって言ったでしょ!?!』

ケータイの向こうから青子の怒鳴り声が聞こえてきた。

「あ……」

快斗がヤベツと言う顔をした。

『まさか忘れてたんじゃ……』

「いや、んなことねえから! す、すぐ行く!」

慌ててケータイを切り、快斗はちらつと新一を見た。

「聞こえたよ。さっさと行けよ」

と、新一が言つと、快斗は苦笑しながら工藤邸をもつダッシュで去つて行つた。

「んじゃまあ。オレらも帰るとしよか」

と、平次も立ち上がる。

「えっ? もう帰るん?」

和葉が名残惜しそうに蘭を見た。

「オレらやって大学があるやるが」

「せやけど……まだ東京見てへんところいっぱいあるし」

すると、平次は一つため息をついた。

「ほないくで」

「へ、平次」

「・・・はよせんと、観光できひんやろ」

平次の言葉に、和葉はパツと笑顔になると、嬉しそうにつなずいた。

数十分後、大阪の夫婦も去って行った。

「・・・何か静かだね」

シンとした工藤邸に蘭の声が響いた。

「これが普通なんだろ」

新一はそう言ってソファに腰掛ける。

蘭も隣に座った。

「お前、病院行ってたんだろ？」

「え？う、うん、まあ・・・」

蘭はなぜか焦ったような顔になる。

「どうだった？まだ、具合わりいのか？」

「うっん。全然、平気。それよりね・・・」

「気分が悪くなったら、すぐに言えよ！」

蘭の言葉を遮り、新一が言った。

「わ、わかったよ。大丈夫だから」
と、蘭は少し困ったように笑いながら言った。

二人はしばらく黙ったまま、宙を見つめていた。

「……やっぱ静かだな……」

「うん。でも新一……」

「まああいつらがいると、うるせえけどよ」

「う、うん……」

蘭は迷ったように、口を開いた。

「ねえ新一」

「あん？」

「来年……ふえるかも」

蘭の言葉に、新一は頭にはてなマークを浮かべた。

「……何が？」

「だから、その、ええっと……」

蘭は慎重に言葉を選びながら言った。

「来年にはね、ここの住人が、一人増えるかも、って……」
「……つまり？」

「だ、だから！来年の今頃には私達二人じゃないってこと！」

さすがの新一も気づいたらしい。

ハツとして蘭を見ると、視線を蘭のお腹に移した。

「・・・マジ？」

「ウソでこんなこと言わないわよ」

「いやだって・・・え？」

新一は一人何やらぶつぶつと言いはじめた。

「えーと、つまり、えーっど・・・」

そのあまりに混乱した様子の新一を見て、蘭は笑った。

「・・・できたの、赤ちゃん」

と、蘭が言つと、新一は立ち上がって、部屋をウロウロとしました。

「いや、あの、その・・・えっ？」

「・・・？」

「つまり・・・オレ達の子供？」

やっと理解できた様子で新一は立ち止った。

「そうよ」

と、蘭は安心したように笑う。

「・・・」

新一はしばらく放心したように蘭を見ていた。

さすがに蘭も不安になって来る。

「・・・よッッしゃあぁー！」

突然新一が大声をあげた。

「うれしいもんだな、結構」

そう言っていると、新一は蘭のお腹に耳をあてた。

「まだ動かないよ」

「いや、何となく、嬉しくて・・・」

新一はそのまま蘭を抱きしめた。

「父親か・・・」

「そうだよ。頑張って、パパ」

蘭がからかうように言っていると、新一は少し赤くなった。

一つの事件が解決したあとの工藤邸。

この日は今までのどんな日よりも、幸せなのだった。

幸せ（後書き）

こんにちわ、 u s a です

このような意味不明な小説を最後まで読んで下さり、ありがとうございます。

これからも、超マイペース&能天気娘、 u s a をよろしくです

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0473s/>

何があっても君が好き

2011年10月7日07時07分発行